

立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）に おける学部の英語教育に関する調査と分析結果： 教員対象の質問紙調査に基づいて

野澤和典・清水裕子

1. はじめに

1998年度からの経済・経営両学部および2000年度からの理工学部における外国語教育改革以来、各言語別に様々な取り組みがなされてきた。外国語科目を履修する学生たちに対する一般的な授業評価アンケート調査に加え、外国語教育に関する各種の質問紙調査が学期ごとに実施されてきている。しかし、専門科目や外国語（英語）教育を担当する教員を対象にした質問紙調査はこれまでなされてきていなかった。特にBKCでは、経済・経営学部で共通の外国語教育カリキュラムを採用しており、副専攻コースにおいても理工学部と共通の科目配置を通して綿密な連携をしてきている。したがって、学生側だけの質問紙調査による分析結果だけでは不十分であり、教員を対象にした質問紙調査実施の必要性を感じていた次第である。

こういった調査の分析結果などを参考に語種ごとに改善策を考え、言語コミュニケーションセンター運営委員会の定期的な討議・決定を踏まえて、翌年度のカリキュラムの中で改善案を実施してきている。英語教育においても同様に、言語コミュニケーションセンター運営委員会の定期的な討議およびBKC英語部会での不定期な討議・決定を踏まえ、改善すべきことに対して毎年即対応してきている。

本調査の結果分析を踏まえ、教員側という別の側面から英語教育を考えることは、BKCでの今後のさらなる外国語（英語）教育改革に大いに役立つものと思う。

2. 質問紙調査について

本調査の質問紙は、小山（2001）の科学研究費補助金基盤研究C-1研究成果報告書を原案として採用し、立命館大学BKCでの状況に合わせる内容に修正して利用した。調査用紙の印刷、配付、回収、集計については、言語コミュニケーションセンターの全面的な協力により、最終的なデータベースを構築できた。以下はそのおおまかな実施方法である。

対象者：BKC 3 学部（経済・経営・理工学部）の全専任教員

配付期間：2000年11月下旬からの約1ヶ月間

配付場所：各教員のビジョンボックス

回収期間：2000年12月下旬

回収場所：各学部教務センターおよび言語コミュニケーションセンター設置の回収箱

集計およびデータベース化：言語コミュニケーションセンター

3. 結果分析

今回の質問紙調査の分析結果を、3.1. 回答者に関する情報、3.2. 英語との関わり（回答者の研究上で）、3.3. 英語との関わり（対学生の教育の場で）、3.4. 立命館大学 BKC の英語教育プログラムのあり方、3.5. 私立総合大学における英語教育の在り方に分け、質問紙（Appendix B）の設問の順を追って示していく。なお、3.2.～3.4.で提示する図表については、所属学部毎の結果及び全体での数値を示してあるが、学部間のサンプル数に大きなへだたりがあるため、単純比較はできないことを断わっておく。また、所属学部が記入されなかったサンプルを所属不明として扱っている。

3.1. 回答者に関する情報

質問紙調査の実施された2000年12月時点で BKC 3 学部（経済・経営・理工学部）の全専任教員（教授・助教授・講師）と特任教授を合わせた数は297名であり、各学部教務センターを通じて全員に配付された。但し、この数には当時内外研究留学中で不在の者や役職の関係で BKC にほとんど不在の者などが含まれている一方、外国人教員6名も含まれている。年末の多忙な時期でもあり、回収総数は82に留まり、回収率27.61%という低回収率となった。

表1 回答者の属性〔学部と職名〕

職名	経営	%	経済	%	理工	%	無回答	総計	%
教授	6	7.3	7	8.5	39	47.6	3	55	67.1
助教授	2	2.4	3	3.7	15	18.3	3	23	28.0
講師	1	1.2	0	0.0	1	1.2	0	2	2.4
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2	2.4
総計	9	10.9	10	12.2	55	67.1	8	82	100.0

3.1.1.1 性別

回答者の性別に関しては、男性79名（96.34%）、女性1名（1.22%）、無回答2名（2.44%）の構成となり、全学的な教員構成比率が高い男性が圧倒的な数となった。もちろん、経済、経営、理工の各学部の専門分野の特殊性から判断すると圧倒的にまだ男性教員が多いことから、予想通り

の結果とも言える。

3.1.1.2 年齢

表2からも明らかなように、50代（35.37%）の回答者数が一番多く、順に40代（23.17%）、30代（18.29%）、60代（15.85%）、20代（1.22%）となっている。

表2 回答者の年齢構成

年代	20代	30代	40代	50代	60代	無回答	全体
人数 (%)	1 (1.22)	15 (18.29)	19 (23.17)	29 (35.37)	13 (15.85)	5 (6.1)	82 (100)
平均年齢	28	35.33	43.74	54.38	63.85	—	45.06

3.1.1.3 着任年度

表3からも明らかなように、回答者の立命館大学への着任年度はバラエティに富んでおり、60年代3名（3.66%）、70年代9名（10.98%）、80年代15名（18.29%）、90年代40名（48.78%）、2000年代7名（8.54%）、無回答者6名（7.32%）となり、90年代に赴任した者が一番多く、半数近くであった。

表3 着任年度と人数

着任 年度	64	69	71	75	76	77	78	79	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	92	93	94	95	96	97	98	99	0	NA	合計
人数	1	2	3	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	2	3	2	2	1	5	8	5	6	5	6	4	7	6	82

3.1.1.4 所属

表4に回答者の所属学部を示したが、理工学部からの回答者が56名（68.29%）と過半数を占めた。経済および経営の各学部の教員定数と理工学部の教員定数はおおよそ1.5対1.5対7の比率であるので、概ねそれに比例した所属からの回答を得たとも言える。

表4 回答者の所属学部

所属	経営	経済	理工	無回答	合計
人数	9(10.98%)	10(12.2%)	56(68.29%)	7(8.54%)	82(100%)

3.1.1.5 職名

回答者の所属学部と職名別の分布を示したのが表5である。各学部とも教授の回答者が過半数を占め、全体で55名（67.1%）であった。次に助教授が23名（28%）、講師が2名（2.4%）、無回答者が2名（2.4%）という順であった。

表5 回答者の所属学部と職名

職名	経営	%	経済	%	理工	%	無回答	総計	%
教授	6	66.7	7	70.0	39	70.9	3	55	67.1
助教授	2	22.2	3	30.0	15	27.3	3	23	28.0
講師	1	11.1	0	0.0	1	1.8	0	2	2.4
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2	2.4
総計	9	100.0	10	100.0	55	100.0	8	82	100.0

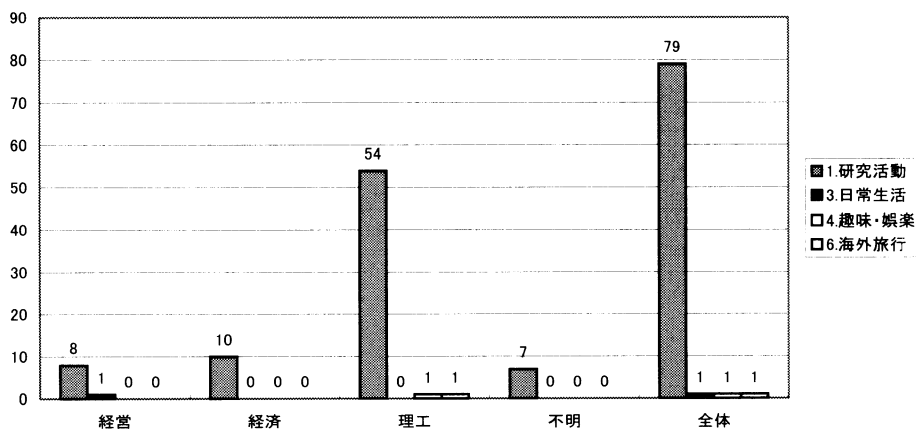
3.2. 英語との関わり（回答者の研究上で）

回答者本人の研究活動の上で、どのように英語と関わっているかを知るため、関わり度の合い(3.2.1), スキル別の使用頻度(3.2.2), 英語力の必要性(3.2.3)について調査した結果を次に示す。

3.2.1. 現在の英語との関わり度

どんな時に英語と関わるかについて、関わり度の高い順に3項目までリストから選択してもらった結果は、以下の通りである。まず、英語との関わり度が一番高い項目としては、図1から明らかのように、回答者82名のうち79名(96.34%)の大多数が「研究活動」を、残りの3名(3.66%)がそれぞれ「日常生活」「趣味・娯楽」「海外旅行」を選択しているが、3学部とも調査対象が研究・教育活動が中心の教員であるので当然の結果であると言える。

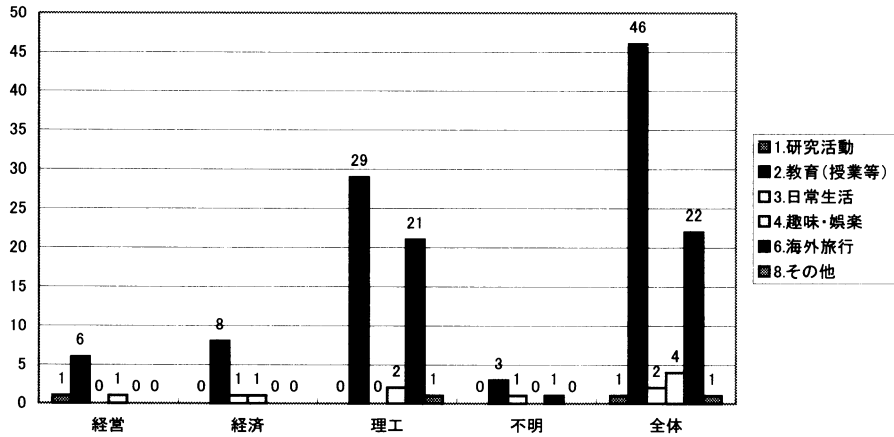
図1 英語との関わり度(第一位)



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 研究活動	8	88.9	10	100.00	54	96.4	7	100.0	79	96.3
3. 日常生活	1	11.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
4. 趣味・娯楽	0	0.0	0	0.0	1	1.8	0	0.0	1	1.2
6. 海外旅行	0	0.0	0	0.0	1	1.8	0	0.0	1	1.2
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	7	100.0	82	100.0

また図2から明らかなように、回答者82名のうち76名が英語との関わり度（第二位）に回答しているが、46名（60.53%）が「授業などの教育活動」で、次に22名（28.95%）が「海外旅行」において英語との関わり度が高いと答えている。

図2 英語との関わり度(第二位)

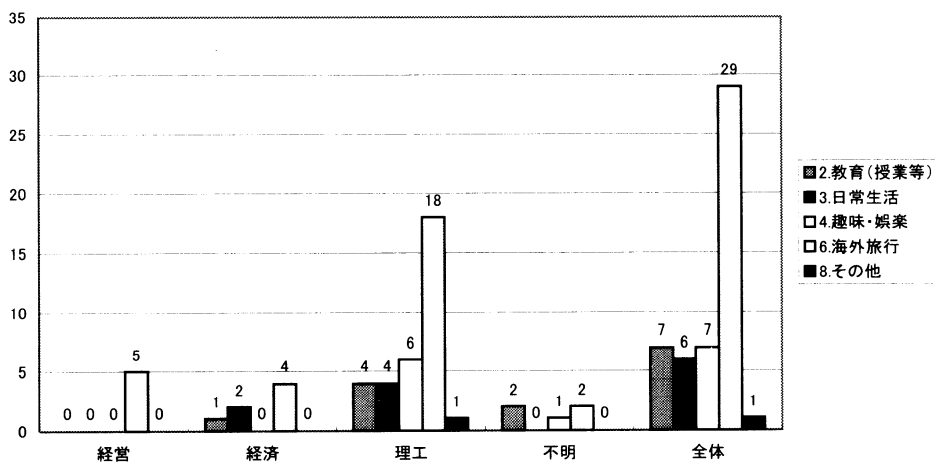


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 研究活動	1	12.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.3
2. 教育(授業等)	6	75.0	8	80.0	29	54.7	3	60.0	46	60.5
3. 日常生活	0	0.0	1	10.0	0	0.0	1	20.0	2	2.6
4. 趣味・娯楽	1	12.5	1	10.0	2	3.8	0	0.0	4	5.3
6. 海外旅行	0	0.0	0	0.0	21	39.6	1	20.0	22	28.9
8. その他	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
合計	8	100.0	10	100.0	53	100.0	5	100.0	76	100.0

無回答 6

さらに図3からも分かるように、回答者82名のうち50名が英語との関わり度（第三位）に回答しているが、そのうち29名（58.00%）が「海外旅行」を選択している。さらに、「教育（授業等）」および「趣味・娯楽」が各7名（14.00%）、日常生活で6名（12.00%）と続いている。

図3 英語との関わり度(第三位)



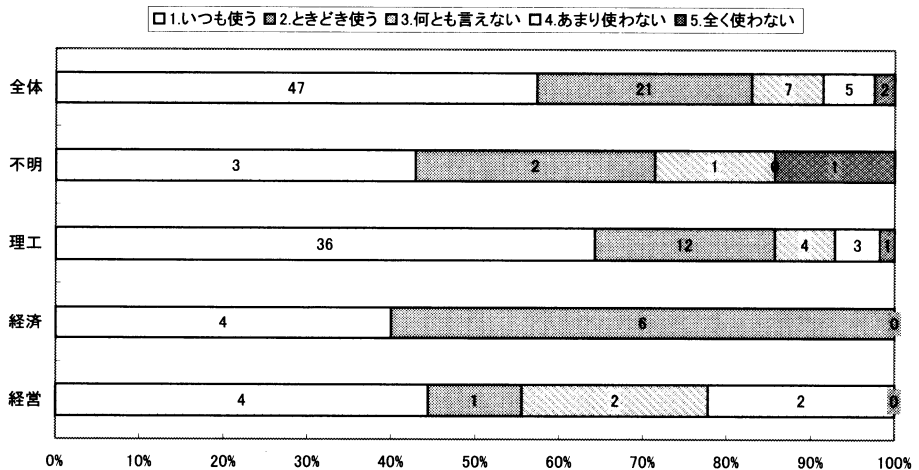
	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
2.教育(授業等)	0	0.0	1	14.3	4	12.1	2	40.0	7	14.0
3.日常生活	0	0.0	2	28.6	4	12.1	0	0.0	6	12.0
4.趣味・娯楽	0	0.0	0	0.0	6	18.2	1	20.0	7	14.0
6.海外旅行	5	100.0	4	57.1	18	54.5	2	40.0	29	58.0
8.その他	0	0.0	0	0.0	1	3.1	0	0.0	1	2.0
合計	5	100.0	7	100.0	33	100.0	5	100.0	50	100.0

無回答 32

3.2.2. 現在の研究活動における英語の使用頻度

次の図4～図7は、「現在の研究活動でどの程度英語を使用しているか」という問いに対して、「読む」「書く」「聞く」「話す」のそれぞれについて5段階（いつも使う・ときどき使う・なんとも言えない・あまり使わない・全く使わない）で回答してもらった結果である。図4の「読む」に関しては、回答者82名のうち47名（57.32%）が「1. いつも使う」と回答し、「2. ときどき使う」の21名（25.61%）を合計すると、68名（82.93%）となり、大半の回答者が「読む」活動をしていることになる。わずか2名（2.44%）であるが、「全く使わない」と回答した者があったが、英語を読む必要のない研究活動をしているか、あるいは英語以外の言語で研究をしているのかは判断できない。

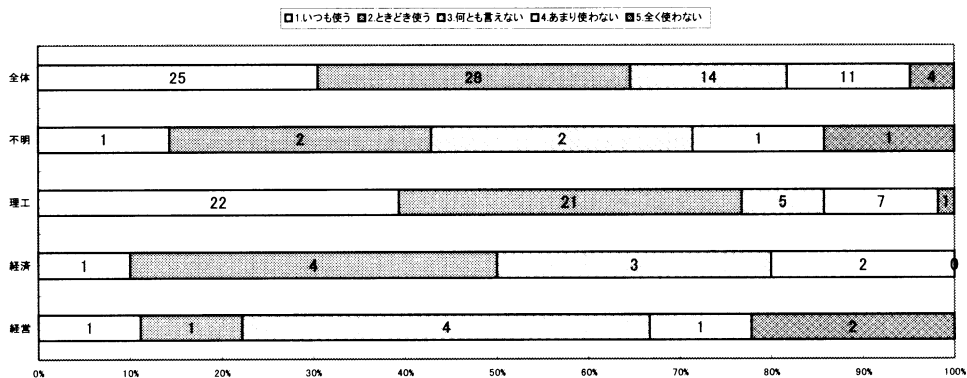
図4 英語との関わり—「読む」



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	4	44.4	4	40.0	36	64.3	3	42.8	47	57.3
2.ときどき使う	1	11.1	6	60.0	12	21.4	2	28.6	21	25.6
3.何とも言えない	2	22.2	0	0.0	4	7.1	1	14.3	7	8.5
4.あまり使わない	2	22.2	0	0.0	3	5.4	0	0.0	5	6.1
5.全く使わない	0	0.0	0	0.0	1	1.8	1	14.3	2	2.4
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	7	100.0	82	100.0

図5の「書く」に関しては、回答者82名のうち28名(34.15%)が「2. ときどき使う」と回答し、「1. いつも使う」の25名(30.49%)を合計すると、53名(64.63%)となり、過半数の回答者が英語で「書く」活動をしていることになる。論文作成ばかりでなく、日常的な E-mail Writing などのコミュニケーション活動も含まれているものと推測する。

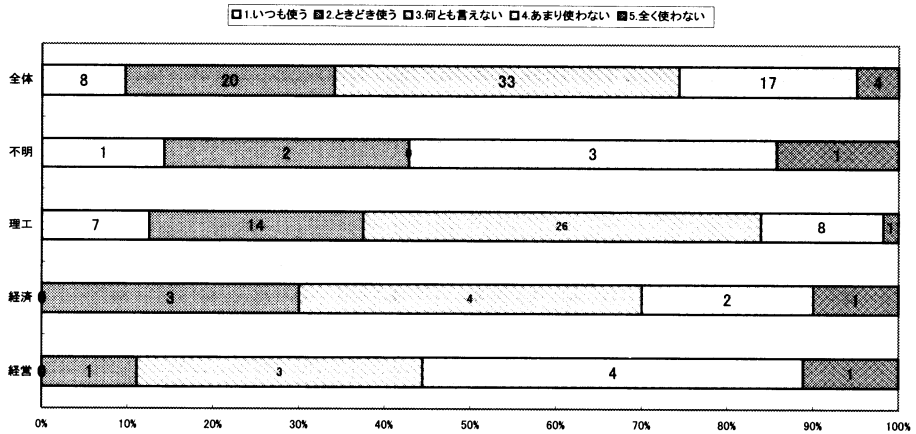
図5 英語との関わり—「書く」



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. いつも使う	1	11.1	1	10.0	22	39.3	1	14.3	25	30.5
2. ときどき使う	1	11.1	4	40.0	21	37.5	2	28.6	28	34.1
3. 何とも言えない	4	44.4	3	30.0	5	8.9	2	28.6	14	17.1
4. あまり使わない	1	11.1	2	20.0	7	12.5	1	14.3	11	13.4
5. 全く使わない	2	22.2	0	0.0	1	1.8	1	14.3	4	4.9
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	7	100.0	82	100.0

図6の「聞く」に関しては、回答者82名のうち33名（40.24%）が「3. なんとも言えない」と回答し、「1. いつも使う」の8名（9.76%）と「2. ときどき使う」の20名（24.39%）の合計28名（34.15%）より多い。「4. あまり使わない」の17名（20.73%）と「5. 全く使わない」の4名（4.88%）の回答者の合計21名（25.61%）を考えると、「聞く」活動に関しては、かなりばらつきがあることになる。日本で、しかも地方都市にある大学での研究活動であるから、「話す」こととの関連もあり、英語母語話者の教員や学生の数が少ないことも影響しているものと思われる。

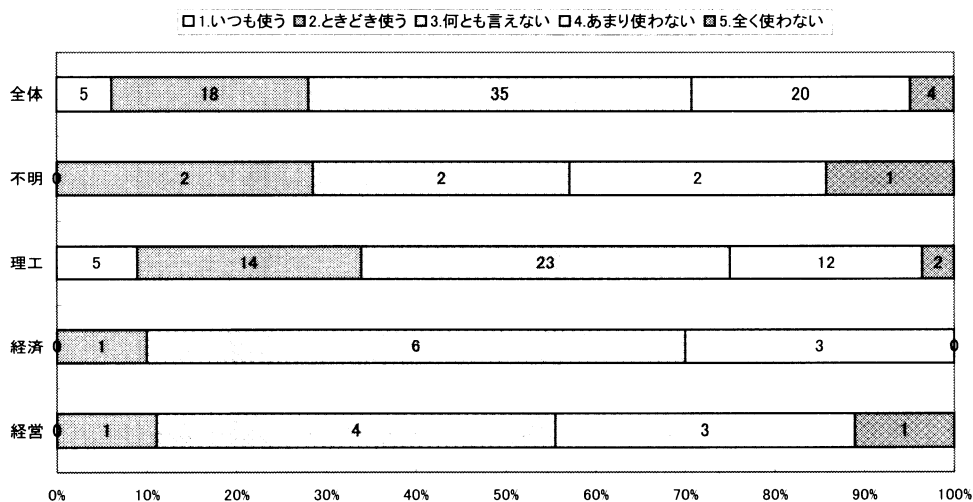
図6 英語との関わり—「聞く」



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 1いつも使う	0	0.0	0	0.0	7	12.5	1	14.3	8	9.8
2. 2ときどき使う	1	11.1	3	30.0	14	25.0	2	28.6	20	24.4
3. 3何とも言えない	3	33.3	4	40.0	26	46.4	0	0.0	33	40.2
4. 4あまり使わない	4	44.4	2	20.0	8	14.3	3	42.8	17	20.7
5. 5全く使わない	1	11.1	1	10.0	1	1.8	1	14.3	4	4.9
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	7	100.0	82	100.0

図7の「話す」に関しては、「聞く」と同様に、回答者82名のうち35名(42.68%)が「3. なんとも言えない」と回答し、最も多い。「1. いつも使う」の5名(6.1%)と「2. ときどき使う」の18名(21.95%)の使用頻度の高い回答者の合計23名(28.05%)と比較して、「4. あまり使わない」の20名(24.39%)と「5. 全く使わない」の4名(4.88%)の回答者の合計24名(29.27%), も「聞く」に関する結果と同様であった。

図7 英語との関わり—「話す」

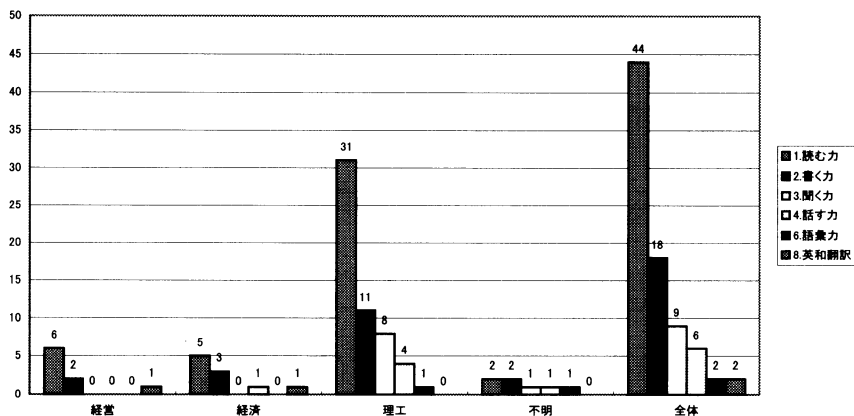


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	0	0.0	0	0.0	5	8.9	0	0.0	5	6.1
2.ときどき使う	1	1.11	1	10.0	14	25.0	2	28.6	18	22.0
3.何とも言えない	4	44.4	6	60.0	23	41.1	2	28.6	35	42.7
4.あまり使わない	3	33.3	3	30.0	12	21.4	2	28.6	20	24.4
5.全く使わない	1	11.1	0	0.0	2	3.6	1	14.3	4	4.9
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	70	100.0	82	100.0

3.2.3. 現在の研究活動における英語力の必要性

「現在、研究の遂行上でどのような英語力が必要か」の問いに関して、回答者81名の中で、必要度の一番高いスキルとして選択した結果が図8である。基本的な4技能の一つである「読む力」と回答したものが44名（54.32%）と過半数を占め、続いて「書く力」18名（22.22%）、「聞く力」9名（11.11%）となっている。その他には、語彙力2名（2.47%）および英和翻訳力2名（2.47%）と回答した者もいた。

図8 研究上で一番必要性の高い英語スキル

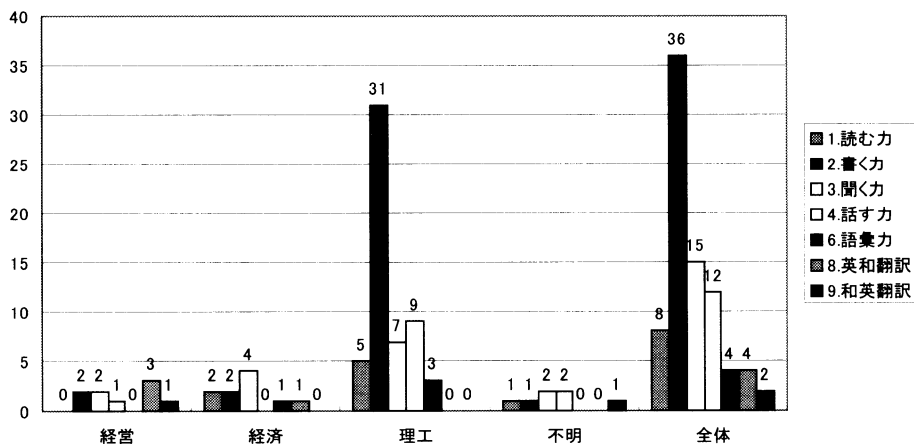


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.読む力	6	66.7	5	50.0	31	56.4	2	28.6	44	54.3
2.書く力	2	22.2	3	30.0	11	20.0	2	28.6	18	22.2
3.聞く力	0	0.0	0	0.0	8	14.6	1	14.3	9	11.1
4.話す力	0	0.0	1	10.0	4	7.2	1	14.3	6	7.4
6.語彙力	0	0.0	0	0.0	1	1.8	1	14.3	2	2.5
8.英和翻訳	1	11.1	1	10.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
合計	9	100.0	10	100.0	55	100.0	7	100.0	81	100.0

無回答 1

同様に、必要度の二番目に高いスキルとして選択した結果が図9である。「書く力」が36名(44.44%)、「聞く力」が15名(18.52%)、「話す力」が12名(14.82%)、「読む力」が8名(9.88%)、「語彙力」と「英和翻訳力」が各4名(4.94%)、「和英翻訳力」が2名(2.47%)の順になっている。

図9 研究上で二番目に必要性の高いスキル

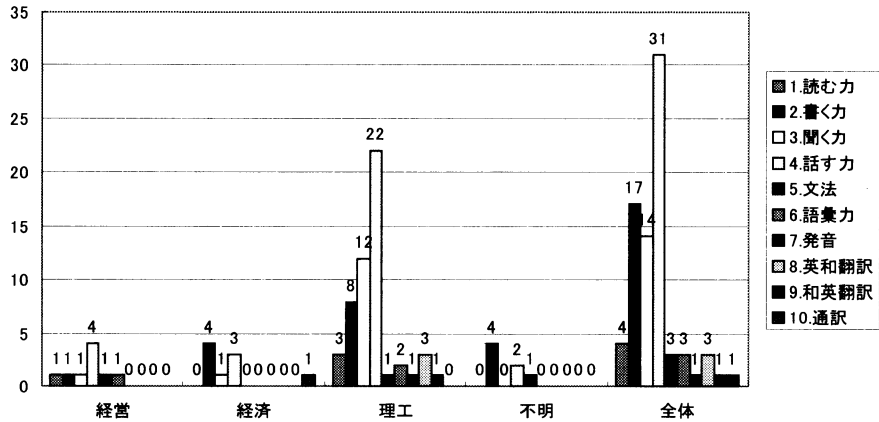


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.読む力	0	0.0	2	20.0	5	9.1	1	14.3	8	9.9
2.書く力	2	22.2	2	20.0	31	56.4	1	14.3	36	44.4
3.聞く力	2	22.2	4	40.0	7	12.7	2	28.6	15	18.5
4.話す力	1	11.1	0	0.0	9	16.4	2	28.6	12	14.8
6.語彙力	0	0.0	1	10.0	3	5.4	0	0.0	4	4.9
8.英和翻訳	3	33.3	1	10.0	0	0.0	0	0.0	4	4.9
9.和英翻訳	1	11.1	0	0.0	0	0.0	1	14.3	2	2.5
合計	9	100.0	10	100.0	55	100.0	7	100.0	81	100.0

無回答 1

さらに、必要度の三番目に高いスキルとして選択した結果が図10であるが、全ての項目が選択されている。その中で一番多かったのは、回答者数78名中31名（39.74%）が選んだ「話す力」である。そして「書く力」17名（21.8%）、「聞く力」14名（17.95%）と続く。

図10 研究上で三番目に必要性の高い英語スキル



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 読む力	1	11.1	0	0.0	3	5.6	0	0.0	4	5.1
2. 書く力	1	11.1	4	44.4	8	15.1	4	57.1	17	21.8
3. 聞く力	1	11.1	1	11.1	12	22.6	0	0.0	14	18.0
4. 話す力	4	44.4	3	33.3	22	41.5	2	28.6	31	39.7
5. 文法	1	11.1	0	0.0	1	1.9	1	14.3	3	3.8
6. 語彙力	1	11.1	0	0.0	2	3.8	0	0.0	3	3.8
7. 発音	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
8. 英和翻訳	0	0.0	0	0.0	3	5.6	0	0.0	3	3.8
9. 和英翻訳	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
10. 通訳	0	0.0	1	11.1	0	0.0	0	0.0	1	1.3
合計	9	100.0	9	100.0	53	100.0	7	100.0	78	100.0

無回答4

3.3. 英語との関わり（对学生の教育の場で）

次に、对学生の状況、つまり教育活動の上で、どのように英語と関わっているかを知るため、教育、指導面でのスキル別の英語使用度（3.3.1）、専門教育上の学生の英語必要度（3.3.2）、学生に不足している英語力（3.3.3）、学生の英語力養成方法（3.3.4）、学部および専門分野で必要とされる英語力（3.3.5）についての調査結果を紹介する。

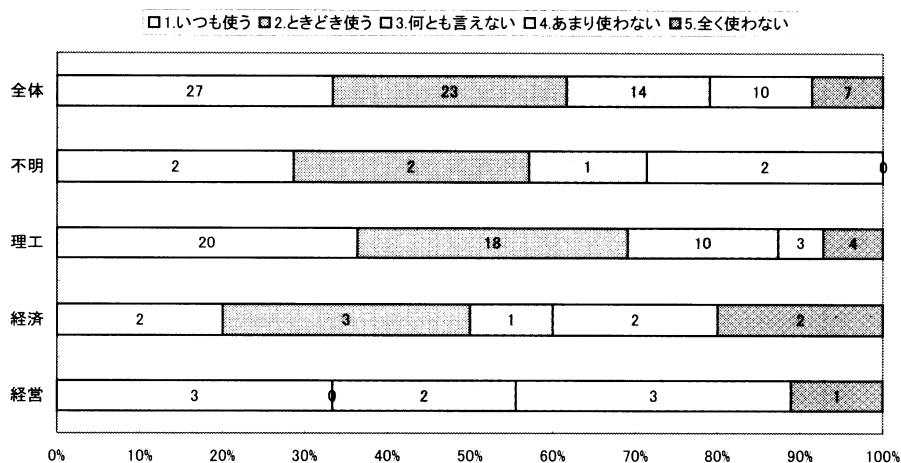
3.3.1. 現在の授業・ゼミ等の教育面・指導面での英語使用度

各回答者が担当している学部学生や大学院生を対象とした授業やゼミ等の教育活動および指導

で、どの程度英語を使用しているかという質問に対するスキル毎の結果は以下の通りである。

まず、「読む」ことに関しては、図11から明白なように、回答者81名のうち、27名（33.33%）が「1. いつも使う」を、23名（28.39%）が「2. ときどき使う」を選択していて、過半数を越える50名（61.73%）が積極的に使用していることが分かる。一方、「4. あまり使わない」10名（12.35%）と「5. 全く使わない」7名（8.64%）の合計17名（20.99%）、つまり5分の1が読む活動に消極的であった。

図11 教育面・指導面での英語使用度(読む活動)

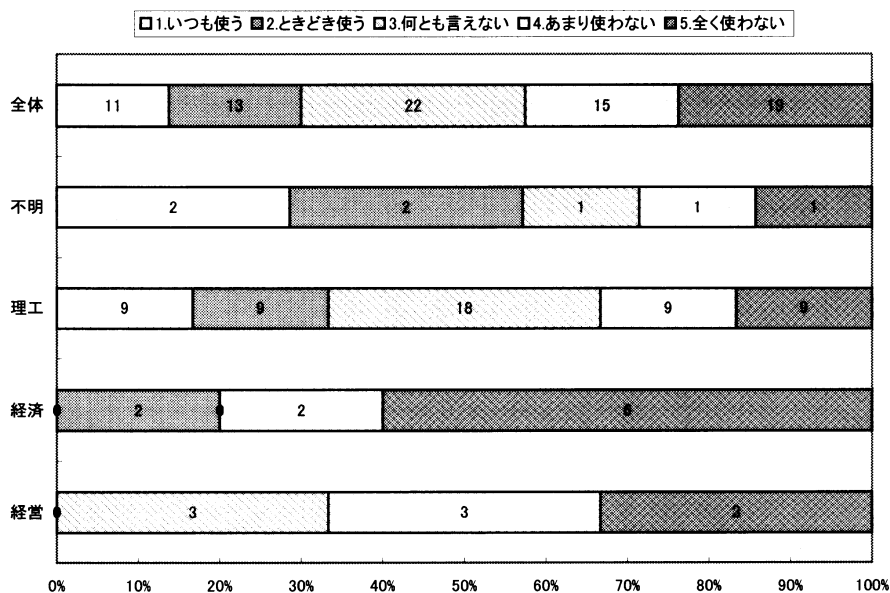


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	3	33.3	2	20.0	20	36.4	2	28.6	27	33.3
2.ときどき使う	0	0.0	3	30.0	18	32.7	2	28.6	23	28.4
3.何とも言えない	2	22.2	1	10.0	10	18.2	1	14.3	14	17.3
4.あまり使わない	3	33.3	2	20.0	3	5.5	2	28.6	10	12.4
5.全く使わない	1	11.1	2	20.0	4	7.2	0	0.0	7	8.6
合計	9	100.0	10	100.0	55	100.0	7	100.0	81	100.0

無回答 1

同様に「書く」ことに関しては、図12から明白なように、回答者数80名のうち、11名（13.75%）が「1. いつも使う」を、13名（16.25%）が「2. とくとき使う」を選択しているのに対して、「4. あまり使わない」が15名（18.75%）、「5. 全く使わない」が19名（23.75%）を選択し、「3. なんとも言えない」の22名（27.5%）を非積極的と考えると、英語で「書く」ことがあまり実践されていないことが分かる。

図12 教育面・指導面での英語使用度(書く活動)

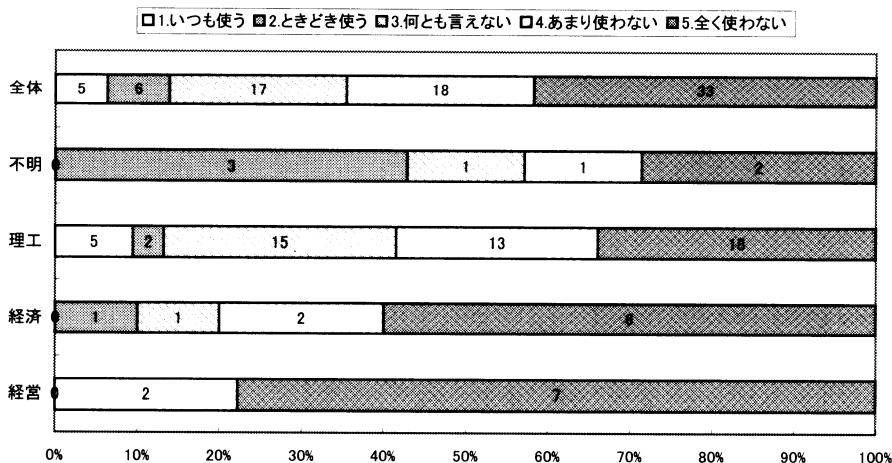


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	0	0.0	0	0.0	9	16.7	2	28.6	11	13.7
2.とくとき使う	0	0.0	2	20.0	9	16.7	2	28.6	13	16.3
3.何とも言えない	3	33.3	0	0.0	18	33.2	1	14.3	22	27.5
4.あまり使わない	3	33.3	2	20.0	9	16.7	1	14.3	15	18.8
5.全く使わない	3	33.3	6	60.0	9	16.7	1	14.3	19	23.8
合計	9	100.0	10	100.0	54	100.0	7	100.0	80	100.0

無回答 2

「聞く」ことに関しては、図13から明らかなように、回答者数79名のうち、「5. 全く使わない」が33名(41.77%)を、「4. あまり使わない」が18名(22.79%)を選択し過半数を越えている。さらに、「3. なんとも言えない」の17名(21.52%)を非積極的と考え、加えると、合計68名(86.08%)の大多数が英語で「聞く」ことを実践していないことが分かる。

図13 教育面・指導面での英語使用度(聞く活動)

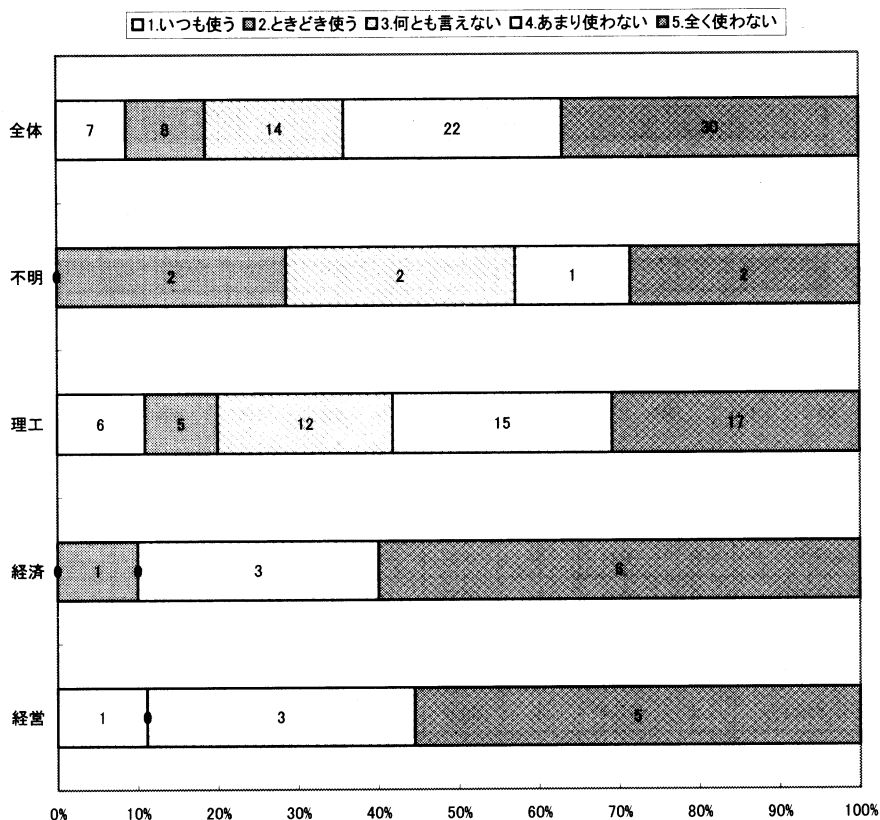


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	0	0.0	0	0.0	5	9.4	0	0.0	5	6.3
2.ときどき使う	0	0.0	1	10.0	2	3.8	3	42.8	6	7.6
3.何とも言えない	0	0.0	1	10.0	15	28.3	1	14.3	17	21.5
4.あまり使わない	2	22.2	2	20.0	13	24.5	1	14.3	18	22.8
5.全く使わない	7	77.8	6	60.0	18	34.0	2	28.6	33	41.8
合計	9	100.0	10	100.0	53	100.0	7	100.0	79	100.0

無回答 3

同様に、「話す」ことに関しても、図14から明らかなように、回答者数81名のうち、「5. 全く使わない」が30名（37.04%）を、「4. あまり使わない」が22名（27.16%）を選択し、合計52名（64.20%）となり、過半数を越える者が消極的な実践状況にある。さらに、「3. なんとも言えない」の14名（17.28%）を非積極的と考え、全体で、合計66名（81.48%）の大多数が英語で「話す」ことを実践していないことが分かる。

図14 教育面・指導面での英語使用度(話す活動)



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.いつも使う	1	11.1	0	0.0	6	10.9	0	0.0	7	8.6
2.ときどき使う	0	0.0	1	10.0	5	9.1	2	28.6	8	9.9
3.何とも言えない	0	0.0	0	0.0	12	21.8	2	28.6	14	17.3
4.あまり使わない	3	33.3	3	30.0	15	27.3	1	14.3	22	27.2
5.全く使わない	5	55.6	6	60.0	17	30.9	2	28.6	30	37.0
合計	9	100.0	10	100.0	55	100.0	7	100.0	81	100.0

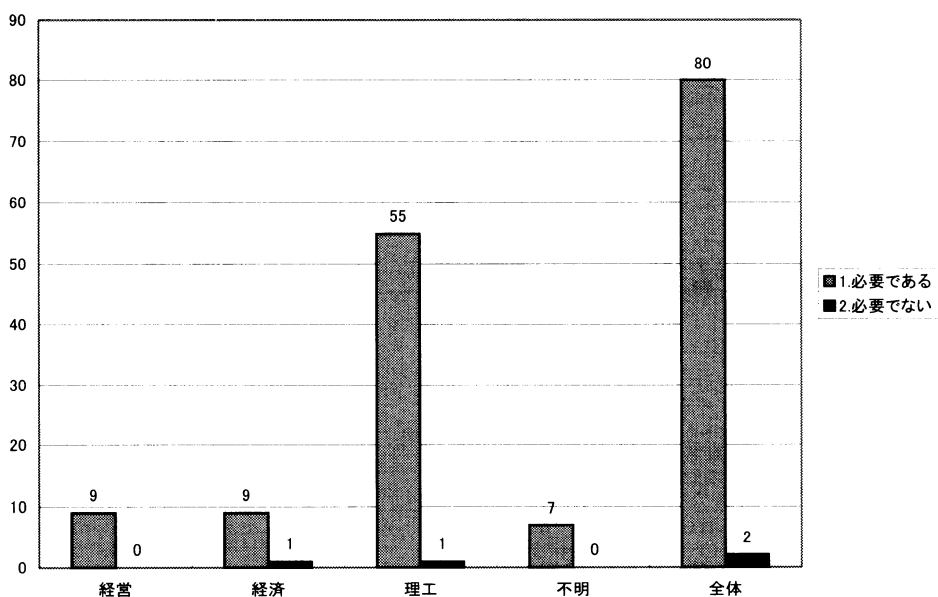
無回答 1

以上の結果から判断すると、学部学生や大学院生を対象とした授業やゼミ等の教育活動および指導において、英語で「読む」活動はある程度されているが、「書く」「聞く」「話す」活動はあまりされていないことが分かり、専門教育と英語教育の接点は、現段階では「読む」活動のみに見出されることがわかる。

3.3.2. 専門教育上の学生の英語必要度

多くの研究分野において最新情報を入手し、研究活動を遂行するためにも、英語は専門教育上不可欠な言語であることは言うまでもない。図15に示されているように、回答者数82名中80名（97.56%）がその必要性を認めている。

図15 専門教育を受ける上で野英語の必要度



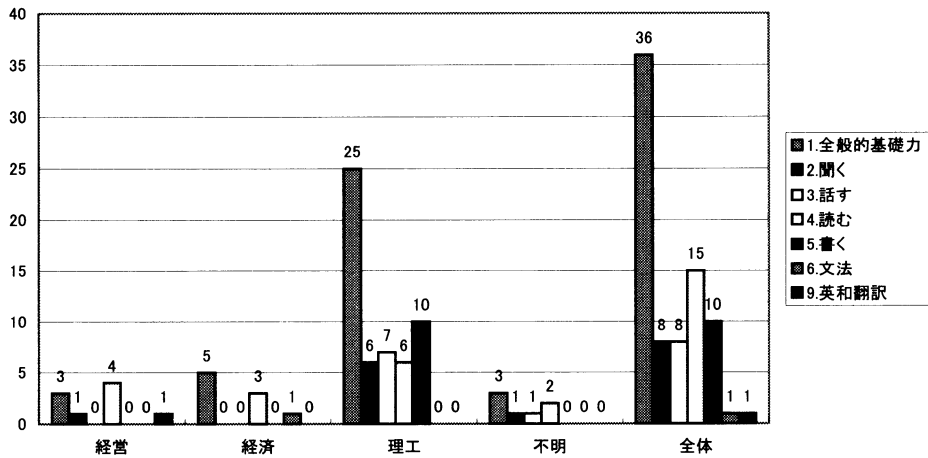
	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.必要である	9	100.0	9	90.0	55	98.2	7	100.0	80	97.6
2.必要ではない	0	0.0	1	10.0	1	1.8	0	0.0	2	2.4
合計	9	100.0	10	100.0	56	100.0	7	100.0	82	100.0

3.3.3. 専門教育を学生が受ける上で不足している英語力

専門教育を受ける上で学生たちにどのような英語力が不足していると感じているかという質問に対する結果が図16～図18である。

回答者数79名の中で、最も不足している英語力として挙げた上位3項目は、「1. 全般的な基礎力」36名（45.57%）、「4. 読む」15名（18.99%）、「5. 書く」12.66%）である。様々な原因が考えられるが、専門教育に携わる教員たちと英語教育を担当する教員たちとの認識にほとんどズレがないことを物語っているとも言えよう。

図16 最も不足している英語力

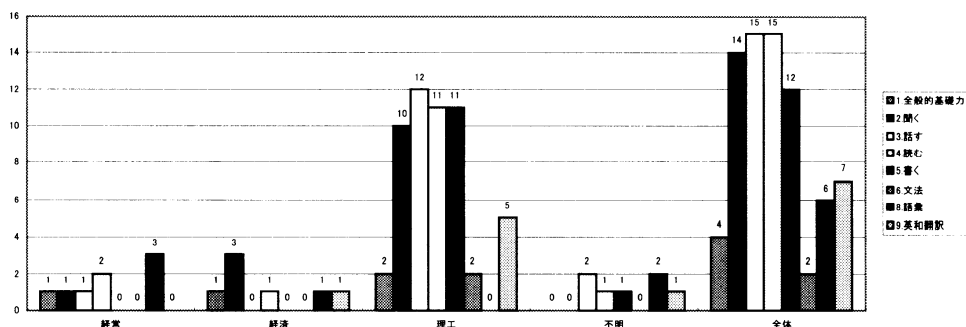


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	3	33.3	5	55.6	25	46.3	3	42.8	36	45.6
2. 聞く	1	11.1	0	0.0	6	11.1	1	14.3	8	10.1
3. 話す	0	0.0	0	0.0	7	13.0	1	14.3	8	10.1
4. 読む	4	44.4	3	33.3	6	11.1	2	28.6	15	19.0
5. 書く	0	0.0	0	0.0	10	18.5	0	0.0	10	12.7
6. 文法	0	0.0	1	11.1	0	0.0	0	0.0	1	1.3
9. 英和翻訳	1	11.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.3
合計	9	100.0	9	100.0	54	100.0	7	100.0	79	100.0

無回答 3

二番目に不足している英語力については、図17が示すように、回答者数75名の中、「話す」15名(20.00%)、「読む」15名(20.00%)、「聞く」14名(18.67%)、「書く」12名(16.00%)の順に挙げており、英語基礎スキルの習得不足を指摘している。

図17 専門教育を受ける上で二番目に不足している英語力

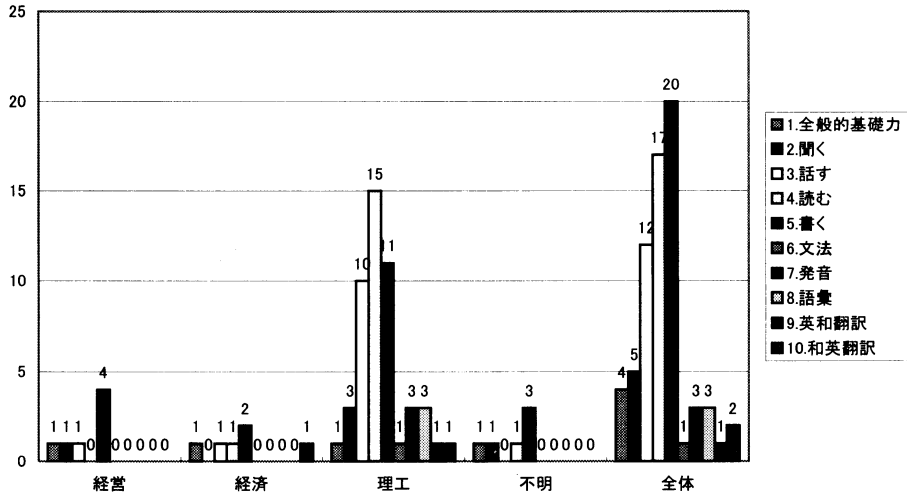


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	1	12.5	1	14.3	2	3.8	0	0.0	4	5.3
2. 聞く	1	12.5	3	42.8	10	18.8	0	0.0	14	18.7
3. 話す	1	12.5	0	0.0	12	22.6	2	28.6	15	20.0
4. 読む	2	25.0	1	14.3	11	20.8	1	14.3	15	20.0
5. 書く	0	0.0	0	0.0	11	20.8	1	14.3	12	16.0
6. 文法	0	0.0	0	0.0	2	3.8	0	0.0	2	2.7
8. 語彙	3	37.5	1	14.3	0	0.0	2	28.6	6	8.0
9. 英和翻訳	0	0.0	1	14.3	5	9.4	1	14.3	7	9.3
合計	8	100.0	7	100.0	53	100.0	7	100.0	75	100.0

無回答 7

三番目に不足している英語力については、図18から明白なように、回答者数68名の中でかなりばらつきがみられるが、ベスト3に挙げているのは、「書く」20名（29.41%）、「読む」17名（25.00%）、「話す」12名（17.65%）の基礎的なスキルである。

図18 専門教育を受ける上で三番目に不足している英語力



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	1	14.3	1	16.7	1	2.1	1	16.7	4	5.9
2. 聞く	1	14.3	0	0.0	3	6.1	1	16.7	5	7.4
3. 話す	1	14.3	1	16.7	10	20.4	0	0.0	12	17.6
4. 読む	0	0.0	1	16.7	15	30.6	1	16.7	17	25.0
5. 書く	4	57.1	2	33.3	11	22.4	3	50.0	20	29.4
6. 文法	0	0.0	0	0.0	1	2.1	0	0.0	1	1.5
7. 発音	0	0.0	0	0.0	3	6.1	0	0.0	3	4.4
8. 語彙	0	0.0	0	0.0	3	6.1	0	0.0	3	4.4
9. 英和翻訳	0	0.0	0	0.0	1	2.1	0	0.0	1	1.5
10. 和英翻訳	0	0.0	1	16.7	1	2.1	0	0.0	2	2.9
合計	7	100.0	6	100.0	49	100.0	6	100.0	68	100.0

無回答 14

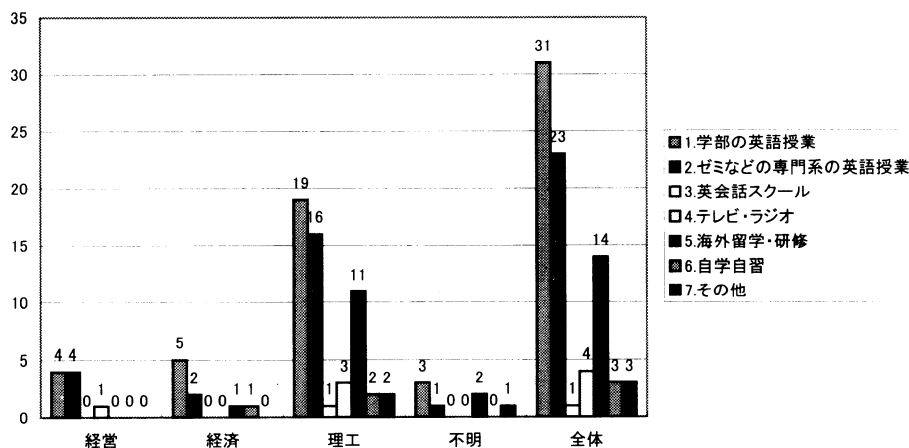
3.3.4. 学生の英語力養成方法

「学生の英語力をどのような形で身に付けさせたいか」という質問に対して上位3つを選択してもらったのが、以下の図19～図21である。

図19から明らかなように、最善の英語力養成法であると考えられているのは、回答者数79名の中で、「1. 学部の英語授業」の31名（39.24%）が第一位である。第二位は、「2. ゼミなどの専門系の英語授業」の23名（29.11%）であり、第三位は「5. 海外留学・研修」の14名（17.72%）である。

外国語教育改革が経済・経営各学部では1998年度に、理工学部では2000年度に実施されてきており、週4回授業のカリキュラムの中で相当の成果を出してきているが、欧米に見られる一日5時間週5日といった集中講座による教育とは大きく異なり、多大な成果を期待することはできない。本来は、高校レベルまでに外国語の基礎力は習得されて、大学レベルではより高度なレベル

図19 学生にとって最善の英語力養成法



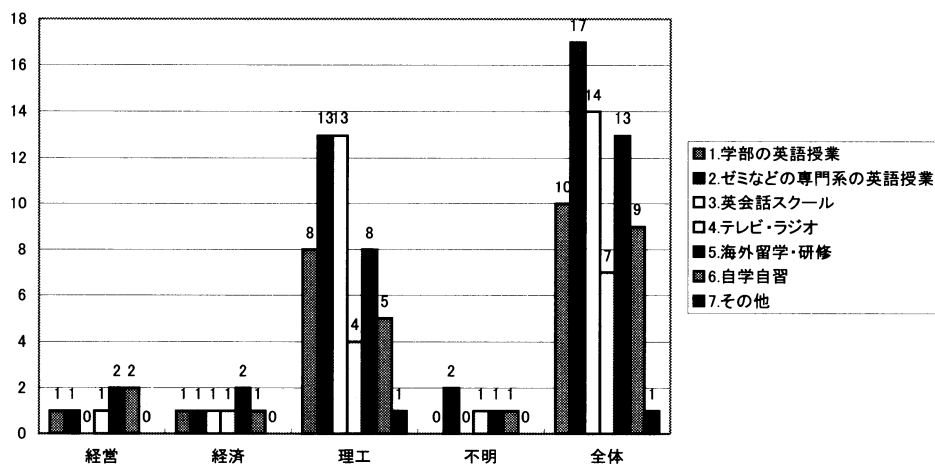
	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 学部の英語授業	4	44.4	5	55.6	19	35.1	3	42.8	31	39.2
2. ゼミなどの専門系の英語授業	4	44.4	2	22.2	16	29.6	1	14.3	23	29.1
3. 英会話スクール	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
4. テレビ・ラジオ	1	11.1	0	0.0	3	5.6	0	0.0	4	5.1
5. 海外留学・研修	0	0.0	1	11.1	11	20.4	2	28.6	14	17.7
6. 自学自習	0	0.0	1	11.1	2	3.7	0	0.0	3	3.8
7. その他	0	0.0	0	0.0	2	3.7	1	14.3	3	3.8
合計	9	100.0	9	100.0	54	100.0	7	100.0	79	100.0

無回答 3

に持っていくことが理想的であるが、日本の中等教育の現状は悲惨なものであり、その結果、基礎力欠如の学生達の増加が最近の顕著な傾向である。基礎力を付けさせる内容に留まらざるを得ず、学部の英語授業だけでは不十分であるのが現実である。授業以外での自学自習・研修がさらに求められていると言えよう。

さらに図20から明らかのように、二番目に考えられる英語力養成法では、回答者数71名の中で、「2.ゼミなどの専門系の英語授業」の17名（23.94%）が第一位である。第二位は、「3.英会話スクール」の14名（19.72%）であり、第三位は「5.海外留学・研修」の13名（18.31%）である。

図20 学生にとって二番目の英語力養成法

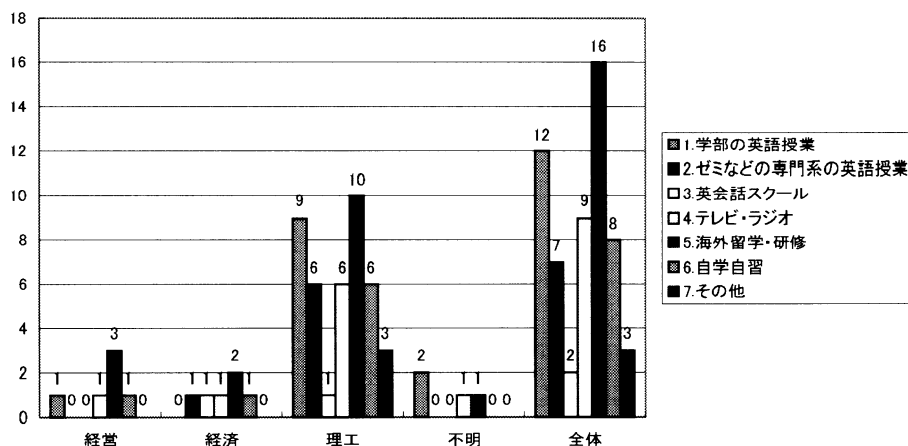


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 学部の英語授業	1	14.3	1	14.3	8	15.4	0	0.0	10	14.1
2. ゼミなどの専門系の英語授業	1	14.3	1	14.3	13	25.0	2	40.0	17	23.9
3. 英会話スクール	0	0.0	1	14.3	13	25.0	0	0.0	14	19.7
4. テレビ・ラジオ	1	14.3	1	14.3	4	7.7	1	20.0	7	9.9
5. 海外留学・研修	2	28.6	2	28.6	8	15.4	1	20.0	13	18.3
6. 自学自習	2	28.6	1	14.3	5	9.6	1	20.0	9	12.7
7. その他	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.4
合計	7	100.0	7	100.0	52	100.0	5	100.0	71	100.0

無回答 11

また図21から明らかなように、三番目に考えられる英語力養成法では、回答者数57名の中で、「5. 海外留学・研修」の16名(28.07%)が第一位である。第二位は、「1. 学部での英語授業」の12名(21.05%)であり、第三位は「4. テレビ・ラジオ」の9名(15.79%)である。第四位の「6. 自学自習」の8名(14.04%)も含めると、学生たちに、より自発的、積極的な英語学習を望んでいることが分かる。

図21 学生にとって三番目の英語力養成法



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 学部の英語授業	1	16.7	0	0.0	9	22.0	2	50.0	12	21.1
2. セミなどの専門系の英語授業	0	0.0	1	16.7	6	14.6	0	0.0	7	12.3
3. 英会話スクール	0	0.0	1	16.7	1	2.4	0	0.0	2	3.5
4. テレビ・ラジオ	1	16.7	1	16.7	6	14.6	1	25.0	9	15.8
5. 海外留学・研修	3	50.0	2	33.3	10	24.4	1	25.0	16	28.1
6. 自学自習	1	16.7	1	16.7	6	14.6	0	0.0	8	14.0
7. その他	0	0.0	0	0.0	3	7.3	0	0.0	3	5.3
合計	6	100.0	6	100.0	41	100.0	4	100.0	57	100.0

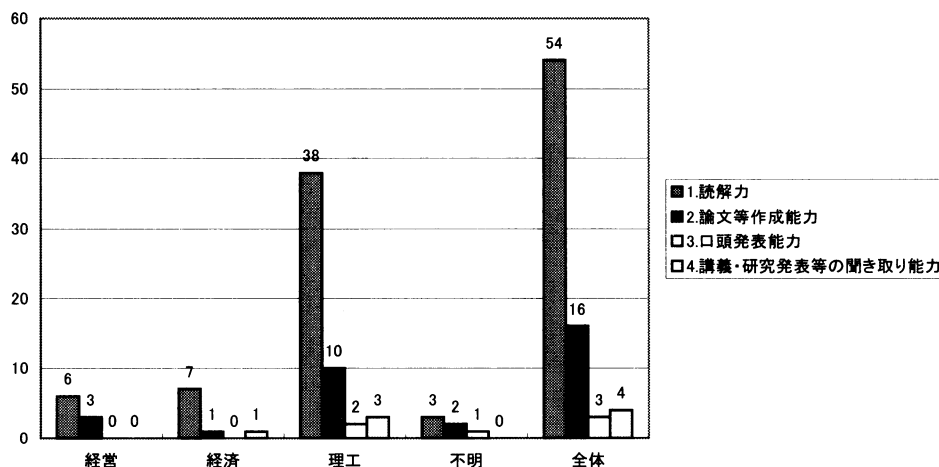
無回答 25

3.3.5. 学部および専門分野に必要とされる英語力

所属している学部や専門分野において必要とされる英語力について、その必要性の高い順に上位3つを選択してもらった結果が、以下の図22～図24である。

回答者数77名の中で、図22から明白なように、最も必要な英語力として、54名（70.13%）が「1. 読解力」、16名（20.78%）が「2. 論文等作成能力」を選んでおり、大多数が「読む」「書く」能力の必要性を指摘している。

図22 所属学部・専門分野で最も必要とされる英語力

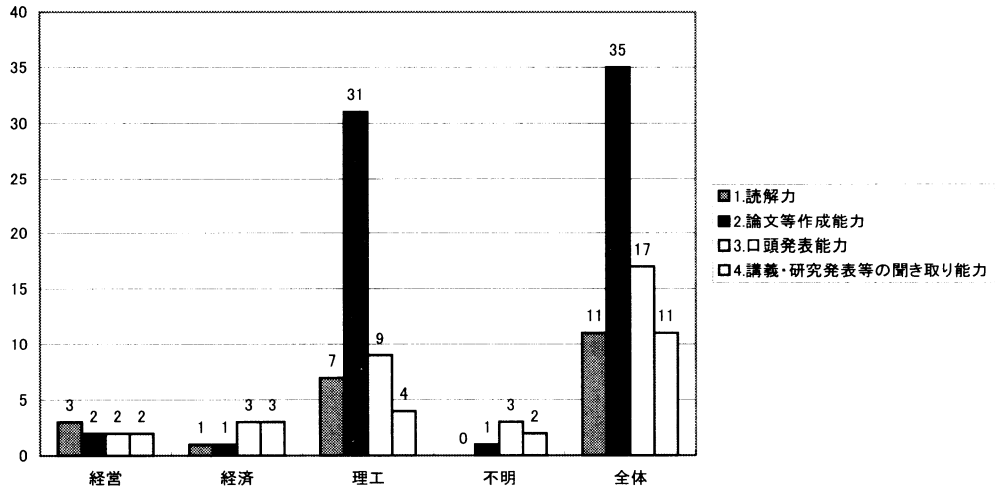


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 読解力	6	66.7	7	77.8	38	71.6	3	50.0	54	70.1
2. 論文等作成能力	3	33.3	1	11.1	10	18.9	2	33.3	16	20.8
3. 口頭発表能力	0	0.0	0	0.0	2	3.8	1	16.7	3	3.9
4. 講義・研究発表等の聞き取り能力	0	0.0	1	11.1	3	5.7	0	0.0	4	5.2
合計	9	100.0	9	100.0	53	100.0	6	100.0	77	100.0

無回答 5

同様に、図23から明らかなように、第二番目に必要とされる英語力としては、回答者数74名のうち、「2. 論文等作成能力」を選んだ回答者が35名（47.29%）であり、「3. 口頭発表能力」17名（22.97%）、「1. 読解力」11名（14.87%）、「4. 講義・研究発表等の聞き取り」11名（14.87%）となった。基本的には「情報発信能力」である「書く」「話す」が求められていると思われる。

図23 所属学部・専門分野で二番目に必要とされる英語力

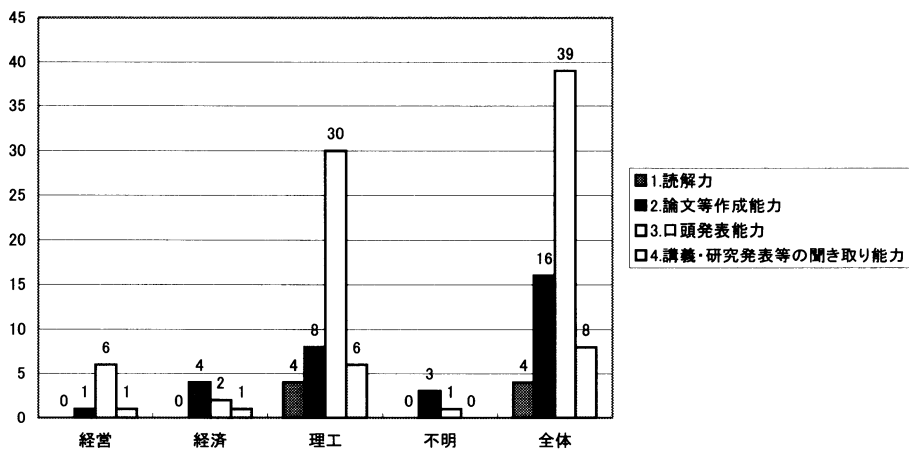


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 読解力	3	33.3	1	12.5	7	13.7	0	0.0	11	14.9
2. 論文等作成能力	2	22.2	1	12.5	31	60.8	1	16.7	35	47.3
3. 口頭発表能力	2	22.2	3	37.5	9	17.6	3	50.0	17	23.0
4. 講義・研究発表等の聞き取り能力	2	22.2	3	37.5	4	7.9	2	33.3	11	14.9
合計	9	100.0	8	100.0	51	100.0	6	100.0	74	100.0

無回答 8

さらに、図24から明らかなように、第三番目に必要とされる英語力としては、回答者数67名のうち、39名（58.21%）が「3. 口頭発表能力」を、16名（23.88%）が「2. 論文等作成能力」を選んでいることから、英語で情報発信する能力の必要性を示す同様の傾向が見られる。

図24 所属学部・専門分野で三番目に必要とされる英語力



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 読解力	0	0.0	0	0.0	4	8.3	0	0.0	4	6.0
2. 論文等作成能力	1	12.5	4	57.1	8	16.7	3	75.0	16	23.9
3. 口頭発表能力	6	75.0	2	28.6	30	62.5	1	25.0	39	58.2
4. 講義・研究発表等の聞き取り能力	1	12.5	1	14.3	6	12.5	0	0.0	8	11.9
合計	8	100.0	7	100.0	48	100.0	4	100.0	67	100.0

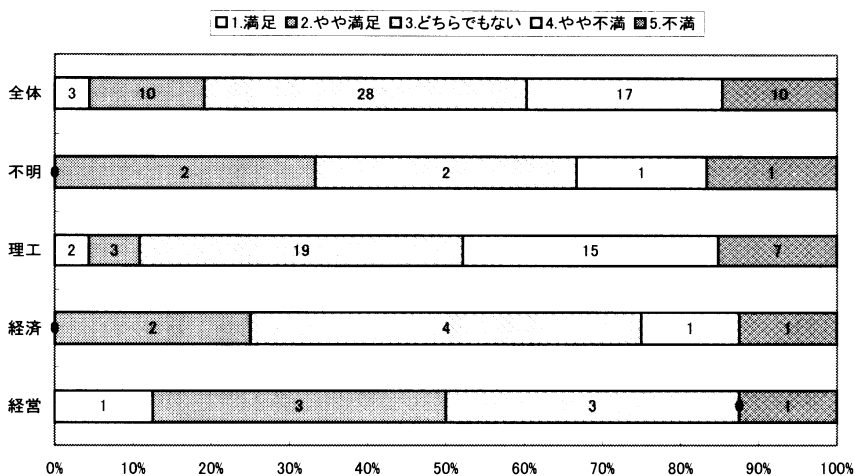
無回答 15

3.4. 立命館大学 BKC の英語教育プログラムのあり方

3.4.1. 英語教育に対する満足度

BKC における英語教育に対する満足度に関しては、図25からも明白なように、回答者数68名の中で、「1. 満足」がわずか3名（4.41%）、「2. やや満足」が10名（14.71%）と五分の一以下である一方、「4. やや不満」が17名（25.00%）、「5. 不満」が10名（14.71%）と、約4割が不満を持っていることになる。

図25 本学の英語教育プログラムの満足度



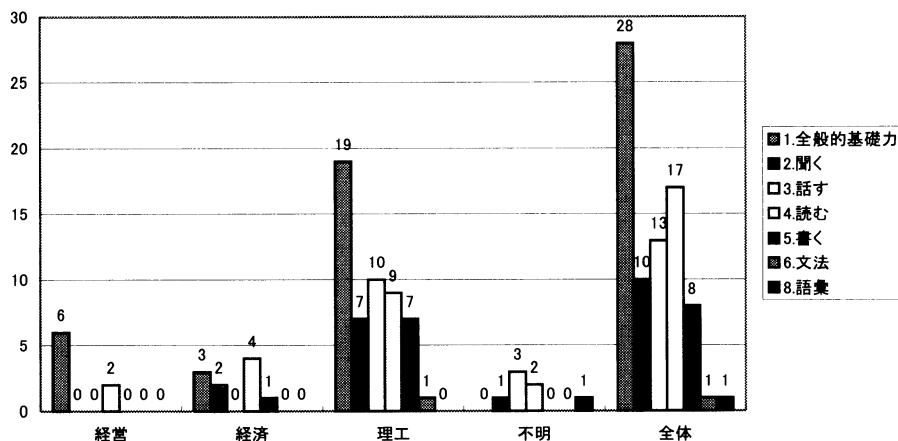
	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1.満足	1	12.5	0	0.0	2	4.3	0	0.0	3	4.4
2.やや満足	3	37.5	2	25.0	3	6.6	2	33.3	10	14.7
3.どちらでもない	3	37.5	4	50.0	19	41.3	2	33.3	28	41.2
4.やや不満	0	0.0	1	12.5	15	32.6	1	16.7	17	25.0
5.不満	1	12.5	1	12.5	7	15.2	1	16.7	10	14.7
合計	8	100.0	8	100.0	46	100.0	6	100.0	68	100.0

無回答 14

3.4.2. 学生の英語力向上に必要な重点的指導スキル

「BKCの英語教育プログラムで、学生の英語力を向上させるためには、どの能力を重点的に指導したらよいか」の質問に対する上位3つの結果は、以下の図26～図28である。図26から明白なように、回答者数78名のうち、最も重点的指導を求めているスキルは、「1. 全般的基礎力」が28名（35.89%）、「4. 読む」が17名（21.79%）、「3. 話す」13名（16.67%）である。

図26 学生の英語力向上のための最重点的スキル

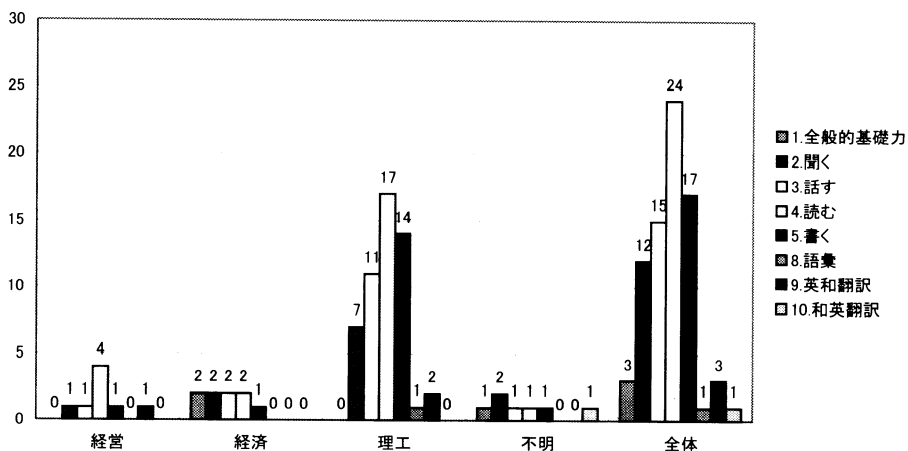


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	6	75.0	3	30.0	19	35.8	0	0.0	28	35.9
2. 聞く	0	0.0	2	20.0	7	13.2	1	14.3	10	12.8
3. 話す	0	0.0	0	0.0	10	18.9	3	42.9	13	16.7
4. 読む	2	25.0	4	40.0	9	17.0	2	28.6	17	21.8
5. 書く	0	0.0	1	10.0	7	13.2	0	0.0	8	10.3
6. 文法	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
8. 語彙	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	14.3	1	1.3
合計	8	100.0	10	100.0	53	100.0	7	100.0	78	100.0

無回答 4

同様に、図27から明らかなように、第二番目の最重点のスキルとしては、回答者数76名のうち、24名（31.58%）が「4. 読む」を選び、続いて17名（22.37%）が「5. 書く」を、15名（19.74%）が「3. 話す」を選んでいる。

図27 学生の英語力向上のために二番目に重要なスキル

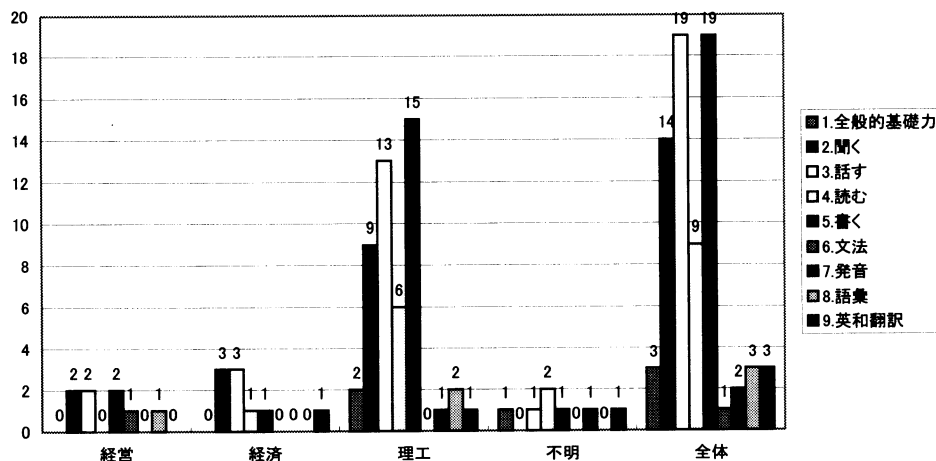


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	0	0.0	2	22.2	0	0.0	1	14.3	3	3.9
2. 聞く	1	12.5	2	22.2	7	13.5	2	28.6	12	15.8
3. 話す	1	12.5	2	22.2	11	21.2	1	14.3	15	19.7
4. 読む	4	50.0	2	22.2	17	32.7	1	14.3	24	31.6
5. 書く	1	12.5	1	11.2	14	26.9	1	14.3	17	22.4
8. 語彙	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
9. 英和翻訳	1	12.5	0	0.0	2	3.8	0	0.0	3	4.0
10. 和英翻訳	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	14.3	1	1.3
合計	8	100.0	9	100.0	52	100.0	7	100.0	76	100.0

無回答 6

さらに、図28から明らかなように、第三番目の最重点的スキルとしては、回答者数73名のうち、19名（26.03%）が「3. 話す」と「5. 書く」を選び、14名（19.18%）が「2. 聞く」を選んで

図28 学生の英語力向上のために三番目に重要なスキル



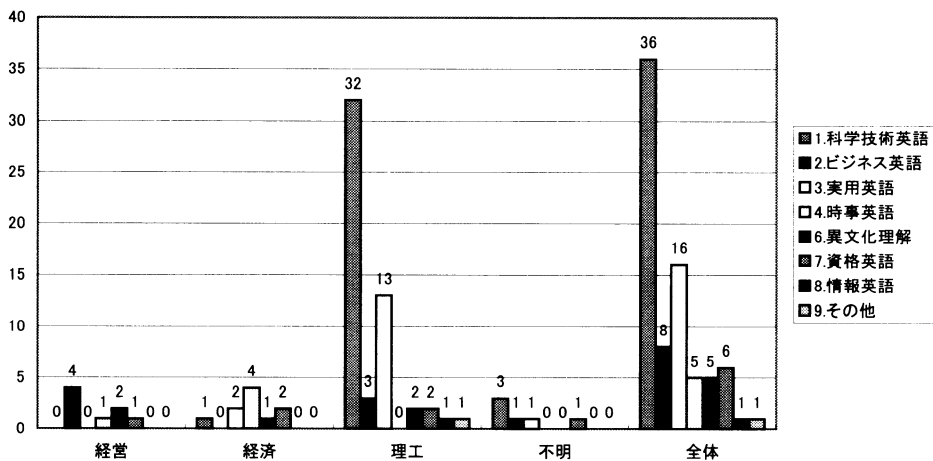
	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 全般的基礎力	0	0.0	0	0.0	2	4.1	1	14.3	3	4.1
2. 聞く	2	25.0	3	33.3	9	18.4	0	0.0	14	19.2
3. 話す	2	25.0	3	33.3	13	26.5	1	14.3	19	26.0
4. 読む	0	0.0	1	11.1	6	12.3	2	28.6	9	12.3
5. 書く	2	25.0	1	11.1	15	30.6	1	14.3	19	26.0
6. 文法	1	12.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.4
7. 発音	0	0.0	0	0.0	1	2.0	1	14.3	2	2.7
8. 語彙	1	12.5	0	0.0	2	4.1	0	0.0	3	4.1
9. 英和翻訳	0	0.0	1	11.1	1	2.0	1	14.3	3	4.1
合計	8	100.0	9	100.0	49	100.0	7	100.0	73	100.0

無回答 9

3.4.3. 重視すべき内容

BKCの英語教育で重視すべき内容についての質問に対する上位3つの結果を、図29～図31に示す。当然のことであるが、各学部の専門教育との関係もあり、求められる内容の相違が回答に反映されている。最も重視すべき内容については、図29から明らかのように、理工学部所属の回答者は、54名中32名(59.26%)の過半数が「1. 科学技術英語」を、経営学部所属の回答者は、8名中4名(50.00%)の半数が「2. ビジネス英語」を、経済学部所属の回答者は、10名中4名(40.00%)が「4. 時事英語」を選択している。

図29 本学の英語教育で最も重視すべき内容

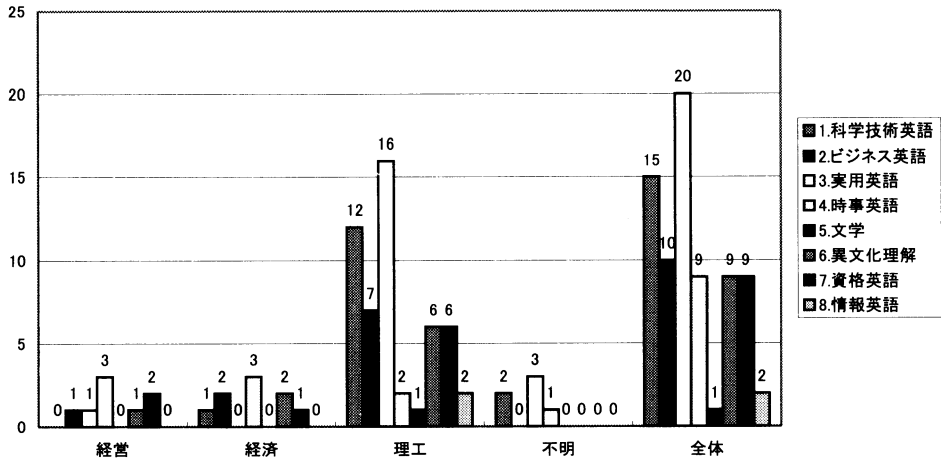


	経営	%	経済	%	理工	%	全体	%	全体	%
1. 科学技術英語	0	0.0	1	10.0	32	59.3	3	50.0	36	46.2
2. ビジネス英語	4	50.0	0	0.0	3	5.6	1	16.7	8	10.3
3. 実用英語	0	0.0	2	20.0	13	24.1	1	16.7	16	20.5
4. 時事英語	1	12.5	4	40.0	0	0.0	0	0.0	5	6.4
6. 異文化理解	2	25.0	1	10.0	2	3.7	0	0.0	5	6.4
7. 資格英語	1	12.5	2	20.0	2	3.7	1	16.7	6	7.7
8. 情報英語	0	0.0	0	0.0	1	1.8	0	0.0	1	1.3
9. その他	0	0.0	0	0.0	1	1.8	0	0.0	1	1.3
合計	8	100.0	10	100.0	54	100.0	6	100.0	78	100.0

無回答 4

同様に，図30から明らかなように，第二番目に重要視すべき内容に対しては，各学部ともばらつきが見られる。全体としては，回答者数75名のうち，20名（26.67%）が「3. 実用英語」を，15名（20.00%）が「1. 科学技術英語」，10名（13.33%）が「2. ビジネス英語」を，9名（12%）がそれぞれ「4. 時事英語」，「6. 異文化理解」，「7. 資格英語」を選択している。

図30 本学の英語教育で二番目に重視すべき内容

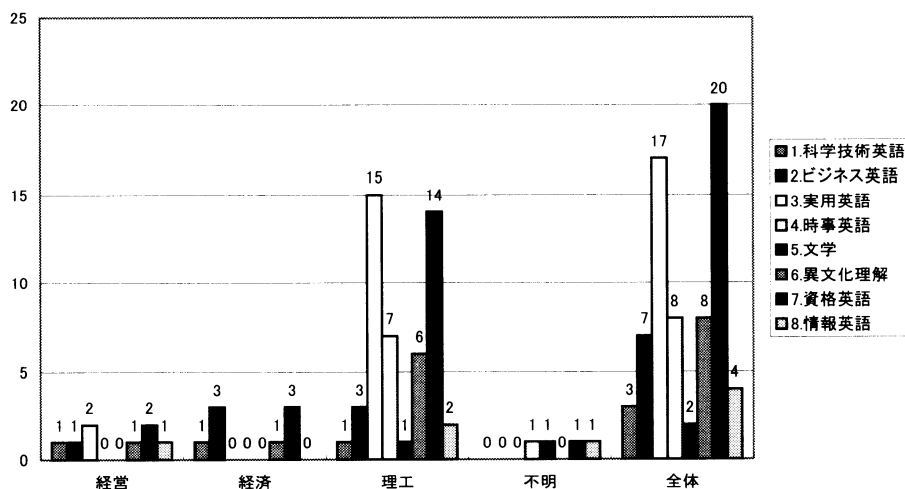


	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 科学技術英語	0	0.0	1	11.1	12	23.1	2	33.3	15	20.0
2. ビジネス英語	1	12.5	2	22.2	7	13.5	0	0.0	10	13.3
3. 実用英語	1	12.5	0	0.0	16	30.8	3	50.0	20	26.7
4. 時事英語	3	37.5	3	33.3	2	3.8	1	16.7	9	12.0
5. 文学	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	1.3
6. 異文化理解	1	12.5	2	22.2	6	11.5	0	0.0	9	12.0
7. 資格英語	2	25.0	1	11.1	6	11.5	0	0.0	9	12.0
8. 情報英語	0	0.0	0	0.0	2	3.8	0	0.0	2	2.7
合計	8	100.0	9	100.0	52	100.0	6	100.0	75	100.0

無回答 7

さらに、図31から明らかなように、第三番目に重要視すべき内容に対しても、各学部ともばらつきが見られる。全体としては、回答者数69名のうち、20名(28.99%)が「7. 資格英語」を、17名(24.64%)が「3. 実用英語」を選択している。

図31 本学の英語教育で三番目に重視すべき内容



	経営	%	経済	%	理工	%	不明	%	全体	%
1. 科学技術英語	1	12.5	1	12.5	1	2.0	0	0.0	3	4.3
2. ビジネス英語	1	12.5	3	37.5	3	6.2	0	0.0	7	10.2
3. 実用英語	2	25.0	0	0.0	15	30.6	0	0.0	17	24.6
4. 時事英語	0	0.0	0	0.0	7	14.3	1	25.0	8	11.6
5. 文学	0	0.0	0	0.0	1	2.0	1	25.0	2	2.9
6. 異文化理解	1	12.5	1	12.5	6	12.2	0	0.0	8	11.6
7. 資格英語	2	25.0	3	37.5	14	28.6	1	25.0	20	29.0
8. 情報英語	1	12.5	0	0.0	2	4.1	1	25.0	4	5.8
合計	8	100.0	8	100.0	49	100.0	4	100.0	69	100.0

無回答 13

3.5. 私立総合大学における英語教育のあり方（自由意見）

所属別の回答者情報と同じような比率で Appendix A にあるような自由かつ多様な意見をいただいた。それらを大まかにまとめて列挙すると、以下のようになる。

- 基礎英語力の欠如とその対応策の必要性
- 専門分野学習のための「読み」「書き」の訓練の重要性
- 英語授業を英語だけで行うシステムの確立
- 大学英語教育以前の問題（高校までの英語学習および日本語能力）の認識と対応
- より集中的な英語教育・学習カリキュラムの検討・構築

4. お わ り に

小山（2001）においては、英語教育の現状解析のために、本研究の原案とした「専門分野の教員を対象としたニーズ調査」の他に、「英語教員への質問紙調査」、および「卒業生を対象に現在の職場における英語のニーズ分析」を行い、工学系大学における英語教育の現状を総括的に分析しているが、本研究では、専門分野の教員を対象にした質問紙調査を行っただけである。しかし、今までに、本学において、このような調査研究が行われていなかった点では、大いに意義のあることである。

「卒業生を対象に現在の職場における英語のニーズ分析」に関しては、清水・小山（2001）が詳細に報告しているが、それによると、英語学習の動機付けと英語力の伸長との関連から、専門分野や将来の職業においてどのような英語の必要性があるかをも鑑みたプログラムの展開が必要だと言える。つまり、ニーズ分析に基づいて、プログラムの構築が行われなければならないのである。

本調査における対学生の専門教育の場での英語の必要性については97.56%の教員が認めている。特に、「読む」活動が中心的な使用スキルとなっているようだが、全体的に、基礎的な英語力の欠如が指摘されており、このことは4技能すべてに影響を与えることになる。英語力を養成する場として、本学の英語教育プログラムへの期待も少なからずあるわけである。そこで、英語力の面でも多様な学生を受け入れている本学においては、プレイスメント・テストなどによる英語力別クラス編成の利点を最大限に活用し、それぞれのレベルに応じた英語学習の必要性を認識させ、各プログラムの中で達成感を感じさせることがさらに必要になってくる。基礎力が備わっていない学習者に対しては、ある一定の英語力まで引き上げるような工夫が必要で、場合によっては、今後、コンピュータを活用した自学自習システムとの組み合わせも考えられよう。全体としては、学部における専門教育との連関を持たせた英語教育を行うことによって、学習者自身に英語の必要性をより強く実感させることができよう。経済・経済学部の英語教育プログラムでは、時事英語やビジネス英語の積極的な導入も行っているが、各学部の専門分野との連携により、必要となる4技能の下位スキルの見直し等を行うなどの、より積極的なアプローチも、今後のプログラム改善の課題となろう。現在、経済学部では、英語基礎語彙および経済に関する英語語彙をもとにしたデータベースの構築も試みているが、プログラム改善のひとつとして貢献できることを期待している。

最後に、本研究では、専門分野の教員を対象にした質問紙調査を行っただけであるが、今までに、本学において、このような調査研究が行われていなかった点では、大いに意義のあることと言える。今後、学部や学習者のニーズをよりの確に把握し、学習者の英語レベルにより適合したプログラムが構築されていくよう努力を続けたい。

なお、今回の調査結果の分析をするにあたって言語コミュニケーションセンターに全面的にお世話になったが、収集したデータの集約時点で一部を統計データ化しなかったことと、オリジナルの生データを紛失したため、回答者各自の「研究上の言語使用」および「海外経験」に関する

質問に対する部分の分析結果が本稿には含まれていないことをお詫びすると共に、ご了承いただきたい。

参 考 資 料

- 小山由紀江(2001).『工学系大学における英語教育の現状分析と効率的システムの構築』課題番号 10610465 平成10年度 平成12年度科学研究費補助金基盤研究(c)-1 研究成果報告書
- 清水裕子・小山由紀江(2001).「工学系大学卒業生の英語ニーズ分析」『立命館経済学』第50巻第4号 p. 42-73.

Appendix A

理工	一般に英語科目に限らず必修科目を減らす大学が多いように見受けられる。しかし英語に関しては少なくとも4年間何らかの英語系科目を学生が履修せざるを得ない体制とすべきであると考えられる。(1セメスタリとも空白をつくらずに)さらに可能な限りネイティブスピーカーとの接触を持ちつつつけられるようにすべきであろう。ただし、一般英語等と専門英語との時間配分は学部により事情が異なるだろうから専門教員との会議の上決定すべきと考える。
理工	専門書を読み、書く力をつけること。帰国子女は一応英語を話せるが必ずしも読解力、作文能力があるとは限らない。やはり基礎学力が基本的に欠けているのが問題である。英語圏では誰でも英語を話す。しかし皆すべて教養があるとは限らない。話せることは必要であるがそれ以前に問題がある。とにかく教養を高めることが必要である。
理工	学内での言語教育を充実させるよりも学外機関に委託した方がよいと思います。学内ではその基礎力の上に立った、そして専門性に富んだ内容を教授したらいいと思います。(学内の語学の先生の専門も含む)
理工	大人数での教育は困難だと思います。学生が英語・外国語能力の必要性を自覚し、個人的にテレビ英会話、スクールへ通うなどすべきでしょう。大学で少人数用スクール(会話・論文作成など)を有料で開くのも一法かと思います。
理工	私は新任でよくわかっていないのですが、本学の語学教育は学生の専門分野、進路なども考慮された上での方策をとっておられるようで、高く評価しています。
理工	国立大学の学生に比べてかなりレベルが低い。大人数教育のせいもあるが、そもそも入学時からレベルが低い学生が入学している。もっと積極的に教育すべきである。
理工	勉強、単位取得と思わずに力をつけさせる方法。どのように興味をもたせるかが重要です。
理工	英語について一般的に基礎学力が不足している。英語で論文が書けない。読解力も足りない。語彙が不足している。
理工	実用英語に関する教育が足りない(専門を含む)。
理工	最近タイに行きましたが、日本の学生のレベルよりもはるかに高い英語力でした。(教員にもいえるかも、国際会議で)個人的には今でも週に1日Nativeと会話を楽んでいます。(お金を払って)
理工	専門分野で活用できる力量の養成に力点をおく。文化の理解などはあとからついてくる。読解重視をやめて会話も含めたバランスのとれた教育が必要。大学外の語学学校・コース(例えば関西日仏学館など)のカリキュラムは参考にならないか。
理工	文系学部が多いので、文系英語になりがち。理系に必要な英語教育が重要。読解力も正確に読むだけでなく、ざっと読んで短時間に概略をつかむ練習をした方が実用的。基本は大学以前にやっておくべきで、大学では専門用語を使ってその分野の英語をやるのが理想。だが基本ができていない学生は多い。高校以下の教育が問題である。
理工	最近の理工学部の学生の英語の学力は2極化しているように思う。高度な英語能力を持っている学生がいる反面、初歩的な文法も分からない学生もいる。話し、聞く能力も大切だが、同時に読む、書く学力も重要であると思う。
理工	基礎英語教育に関しては、資格を重視した英語教育は専門学校レベルになるので、そうではなく、異文化理解や日本人の苦手なディスカッションなどに力を注いだらよろしいと思う。
理工	次のような信じられない学生が無視できない数いる。こういう学生にもレベルアップを。1. 単語を辞書の最初につけている訳語におきかえる。2. 訳語の並びをじっとらんで日本語らしくなるように並び替える。(英文法無視) 3. それで作業完了。その日本語らしき文章の意味内容を考えない。
理工	留学生を英会話授業のTAとして採用。英語の授業では全く日本語を使わない。
理工	我々が学生の頃は学生自身の英語教育に対する認識がかなり低かった様に思います。今でもその頃の影響か認識が低いままです。今はTOEFLなどの具体的目標もありますので、ある意味ではやり易いところもあるのでしょうか。
理工	学生達が英語ができないのは英語の先生の責任にするのは無理だと思う。どうしたらいいかという、①学生にNHKのビジネスイングリッシュ、英会話を聞けといっている(毎日)②英検とかTOEFL、TOEICもチャレンジすることといっている。③英語の〇〇先生には言ったのは少なくとも単語の説明くらいは英語で答えるように学生にさせる。たとえば楽器の「太鼓」を英語で説明させるのである。④専門単語については講義で先生がスベルも黒板に英語で書いて教えてやることである。以上4つの方法があると思う。

理工	本学について語学教育をもっと専門に結びつける必要があります。すなわち以前あった学部での科学技術英語担当の専門に属する教員を増やす。専門あるいは一般の英語等による講演会を定期的にもつ、これは一大学では無理であるから、関西4大学、コンソーシアム京都など大学間共通の費用をもち専従の講師をやとう。
理工	1. 話せる英語 2. 資格英語
理工	「英語を話す、話せる」ということのみが取り上げられている。それが即ち「国際化」というように誤解しているように思える。「何を話すか」ということが、なおざりになっているようである。それと英語国民だけでなく、他の言語国民との共通言語として認識し、それを学生に徹底すべきである、と考える。
理工	国費留学が出来るような全般的なレベルアップが欲しいところであるが、早稲田、上智などが所属大学の主流である。この原因と対策について再考する必要があると思う。
理工	ゼミで英語の特訓をしているが、自分の言葉で語ろうとはしない、あるいは間違っていることを極端におそれる傾向が目立つ。これは多人数のクラスで間違いを指摘され（あるいは指摘される人を見て）一種の恐怖心が植え付けられたためではなからうか。実現は困難なことは承知しているが少数で間違っても良い（通じれば良い）という安心感を持たせて英語を習得させてやりたいと思う。
理工	理系に限定してお答えします。科学論文が読むことができるような指導。コミュニケーションは英会話スクールにまかせればよい。英文学などは不要。BLUE BACKS「理系のためのサバイバル英語入門」参照
理工	学部と院とでは英語の重要度が異なるので、それに応じた教育が必要。
理工	重要な点は「英会話によってコミュニケーションを滑らかに行なう」ことではないと思います。論理的に意思表示をきちんとできることが重要です。ロジカルに話すこと、書くこと。いたずらにテクニカルな英語術を追求しても仕方ない。まず日本語でロジカルな会話あるいは自分の思想を話すことをできる訓練をすることです。日本語でたくさん話術をできない人が英語で表面だけを取り繕っても英語を話す国民から軽く見られるだけなのではないか。
理工	語学習得は集中が必要。例えば1年間英語付けにするとか。授業時間をもう少し増やしても効果は期待できない。（特に英会話）
理工	理工系の大学・大学院では研究に関連した本、論文、マニュアルが自由に読みこなせるようになることが必要。英語は読めてもその意味（物理的内容、機械の入力、動きなど）をイメージできない学生がほとんどのように思える。英語云々以前に日本語の読み、書き、会話に問題があるように感じる。
理工	目的：情報伝達のため（読む、書く、聞く、話す）・英語圏の文化理解のため 方法：文法、発音、その他基礎的なことは中高6年間でOK。大学は英語教育をしない。理由は中高で済ませているから。大学は語学能力の高度化のための「補助をする」そして「認定する」ということはどうですか。
理工	英語の専門科目テキストが読める能力は最低限つけて欲しい。（専門科目を日本語で習得済みという前提で）
理工	論文を書け、学会で討論ができ、かつコミュニケーションが海外で最低限度できるようにすべきであり、そのためには専門的にはその専門の授業の中で英語なりの他の言葉が使えるようにしなければなりません。話す、聞く、書くチャンスをあたえなければなりません、日本の学生にはそれが極めて少ないのではないかと思います。
理工	基礎として日常英会話。技術者として論文がかけること。以上の能力が得られるような教育をしていただきたい。
理工	学生の英語力（現実）と大学での要求（理想）の間のギャップを埋める、語学教員の方々の努力と熱意に感謝しています。
理工	実用英語（話す、聞く）が重要。これが出来れば読む、専門英語はついてくる。
経済	「聞く」「話す」という教育は長時間（多くのコマ）を要するし、両者の前提は基礎力（読む、書く）だと思いますので、読み（読解力）、書くことについて予習・復習をせざるをえないような教育システム、方法を期待します。
経済	低回生での語学教育を専門課程で活かすための工夫（外国語担当者と専門担当教員協同によるプログラムの開発と実行など）。

経済	私は英語が日本人全員にあまねく必要であるとは考えていませんし、小学校から他教科を削ってまで英語教育導入には反対です。大学においても同様に全員が英語を学習する必要はないと思います。どうせ海外旅行くらいしか英語を使うチャンスもないのだから。そのかわり英語を本当に必要とする少数の諸君については徹底的に教育する方が費用対効果も大きいと思います。英語が全くだめな大学生がいることは問題ではないと思います。分数の計算ができない大学生がいることの方がはるかに深刻です。
経済	最近入試方法により英語をあまり学習しない者の入学者がふえている。英語のレベルアップを底上げするカリキュラムが必要。併せて学生の言語向上度に関する統計（入学から卒業まで）をとる必要がある。
経済	コンピュータを利用した英語運用能力のための教育開発。
経済	理想的には関西学院大学政策科学部のように、1・2年次に英語をたたきこみネイティブによる英語の授業が成立するようにする。教員も学生と一緒にBKCでTOEFLを受験したいです。
経営	たとえば英語力がTOEFL500以上になるまで大学卒の資格を与えるな！
経営	英語以前の問題として近年とみに学生の基礎学力が特に日本語力が落ちてきているのを感じる。単に英語教育ではなく英語を含めた「国語能力」もしくは「言語能力」の向上を図るべき時期ではないかと思う。
経営	英語の論文が読めない大学院生が数多くいることに驚いている。学部生も雑誌記事が読めない。学部教育は全て英文読解に充て、英会話はやりたい人が自費で英会話スクールに行くようにすべきと思う。
経営	2本柱（基礎的英語力（異文化理解を含む・ビジネスにおいても必要なもの）＋専門とリンクした英語力）とし、前者はグレード制（既に十分な能力があるものはパスも可）、後者は内容を選択させた上で必修とする。TOEFL・TOEICなどはエクステンションなどに委ねる、ではどうかと考えます。英会話学校的なものは外部に委ね、大学らしいものに期待します。
経営	「日本的な」（文化や芸術、芸能などを含め）教養に基づいて言葉としての英語を操り、人と人との結びつきを深め、そこから国際的な関係を作り上げていく上での基礎的な学習の場であってほしい。
不明	大変改善されてきている。
不明	最近は英語教育のレベルも急上昇してきたと思われる。日本語も含めて英語でのプレゼンテーション（特に院生）ができることが好ましい。実力をもつ学生もかなりいると思われるのに意識を高揚させるためのさらなる努力が必要と考えられる。

Appendix B （オリジナル質問紙）

学部の英語教育に関するアンケート

<回答は、原則として右の□の中に該当する数字を記入し、その他の場合は指示に従い空欄に書き込んで下さい。>

A. 所属など

- 性別：1. 男 2. 女
- 年齢：() 歳
- 本学に着任された年度： 年より
- 所属：() 学部
- 職名：1. 教授 2. 助教授 3. 講師

B. 英語との関わり（ご自身の研究上で）

1. 現在、先生はどのような時に英語との関わりをお持ちですか？（関わりの深い順に3つまで）

1 2 3

1. 研究活動 2. 教育(授業等) 3. 日常生活 4. 趣味・娯楽
 5. 英語学校等 6. 海外旅行 7. ほとんど関わりがない 8. その他()

2. 現在、研究活動でどのくらい英語を使われていますか。5段階でお答え下さい。

いつも使う

全く使わない

読む 1 — 2 — 3 — 4 — 5

書く 1 — 2 — 3 — 4 — 5

聞く 1 — 2 — 3 — 4 — 5

話す 1 — 2 — 3 — 4 — 5

3. 現在、研究の上でどのような英語力が必要ですか。必要性の大きいものから3つ選んで、番号で答えて下さい。

1. 読む力 2. 書く力 3. 聞く力 4. 話す力 5. 文法 1 2 3
 6. 語彙力 7. 発音 8. 英和翻訳 9. 和英翻訳 10. 通訳

4. 研究上の言語使用について、もう少し、具体的に伺います。

以下の項目について、研究上で特に必要なものに◎、必要なものに○をつけて下さい。(幾つでも可)

A. 読む／書くについて

英語

読む

書く

日本語

読む

書く

その他の言語() 語)

読む

書く

学会誌の論文

学会誌の要約文

学会発表の応募書類

テクニカル・レポート

テクニカル・マニュアル

特許出願関係

ビジネス文書

電子メール

連絡用メモ

インターネット利用 or データベースへのアクセス

その他 1 ()

その他 2 ()

B. 聞く／話すについて

英語

聞く

話す

日本語

聞く

話す

その他の言語 () 語)

聞く

話す

学会での口頭発表

機械の使用方法などの口頭説明

外国人研究者とのコミュニケーション

外国人学生とのコミュニケーション

大学内での会議・打ち合わせなど

大学外での会議・打ち合わせなど

その他 1 ()

その他 2 ()

C. 英語との関わり（対学生の教育の場で）

次に、先生が担当されている学部、大学院の授業やゼミなどを通じて、教育面、指導面で英語とどのように関わっているか、お伺い致します。

1 現在、授業やゼミなどの教育面、指導面で先生ご自身がどのくらい英語を使われていますか。5段階でお答え下さい。

いつも使う

全く使わない

読む

1 — 2 — 3 — 4 — 5

書く

1 — 2 — 3 — 4 — 5

聞く 1 — 2 — 3 — 4 — 5

話す 1 — 2 — 3 — 4 — 5

2 現在、専門教育を受ける上で、学生に英語が必要であると思いますか？

1. 必要である 2. 必要ではない

「必要ではない」を選んだ場合その理由：

「必要である」と答えられた方は、引き続き 3, 4 の質問にお答え下さい。

「必要ではない」と答えた方は次に、D. 英語科目のあり方 にお進み下さい。

3. 現在、専門教育を受ける上で、学生のどのような英語力が不足していると感じますか。(最も不足しているものから順に3つまで)

1 2 3

1. 全般的基礎力 2. 聞く 3. 話す 4. 読む 5. 書く 6. 文法
7. 発音 8. 語彙 9. 英和翻訳 10. 和英翻訳 11. 通訳
12. このままでよい

F. 学生の英語力をどういう形で身につけさせたいと思われませんか。(上位3つまで)

1 2 3

1. 学部の英語授業 2. ゼミなど専門系の英語授業 3. 英会話スクール
4. テレビ・ラジオ 5. 海外留学・研修 6. コンピュータ利用を含めた自学自習
7. その他 _____

5. 一般的に貴学部で必要とされる英語力、および、あなたの専門分野で必要とされる英語力について、必要性の高い順に1, 2, 3, ..., と好きなだけ順位を記入して下さい。

読解力

論文等

作成能力

口頭発表能力

講義・研究発表等の聞き取り能力

その他

D. 本学の英語教育プログラムのあり方について

1. 本学の英語教育に対して全般に伺います。

満足 やや満足 どちらでもない やや不満 不満

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5

2. 本学の英語教育プログラムで、学生の英語力を向上させるためには、どの能力を重点的に指導したら良いと思いますか。指導の上で、重視して欲しいと思われるものを上位から3つ選んでください

1 2 3

1. 全般的基礎力 2. 聞く 3. 話す 4. 読む 5. 書く 6. 文法

7. 発音 8. 語彙 9. 英和翻訳 10. 和英翻訳 11. 通訳

3. 本学の英語教育で、重視するべきだと思う内容を上位から3つ選んで下さい。

1 2 3

1. 科学技術英語 2. ビジネス英語 3. 実用英語 4. 時事英語 5. 文学

6. 異文化理解 7. 資格英語（英検, TOEFL, TOEIC など） 8. 情報英語

E. 海外経験について（先生ご自身の海外経験について、お答え下さい。）

（一回の滞在が3カ月以上、滞在期間の長い順に最大4ヶ所まで。*については下の説明参照）

	年度	国名	滞在期間	主な使用言語	*目的*	**現地での所属**
例	95年より	フィリピン	1年	1, 2	4	2
1.	_____	_____	_____	_____	_____	_____
2.	_____	_____	_____	_____	_____	_____
3.	_____	_____	_____	_____	_____	_____
4.	_____	_____	_____	_____	_____	_____

*主な使用言語が1. 英語と2. 日本語の場合はその数字を、それ以外の場合はその言語名を書いて下さい。

**海外滞在の目的については、以下の数字で答えて下さい。

1. 留学 2. 企業研修 3. 出張/駐在 4. 研究 5. 技術指導 6. 教育 7. 旅行
8. その他（内容を書いて下さい）

***現地での所属については、以下の数字で答えて下さい。

1. 高校 2. 大学・大学院 3. 日本企業/団体 4. 現地企業/団体 5. 日本研究所

6. 現地研究所 7. なし 8. その他（内容を書いて下さい）

G. 最後に、一般に私立総合大学での英語教育の在り方について、自由にご意見をお書き下さい。

御協力有難うございました。集計結果は後日印刷物にて御報告致します。